

佐倉義民伝 甚兵衛渡し場  
講談に引き込まれた午後

江戸時代、4代将軍徳川家綱の時代に下総佐倉藩 11 万石の城代家老を務めていたのは堀田玄蕃。印旛沼の干拓と新田開発に乗り出したが、工事が難航して藩の財政は逼迫。

玄蕃はそれを穴埋めするために年貢を2割増しにしたが、結果として領内 229ヶ村の民百姓の苦しみも増すことになった。これに立ち上がったのが公津(こうづ)村の名主、木内惣五郎。

江戸に出て幕府に直訴することにした。

この訴えを聞いた酒井雅楽頭(うたのかみ)は佐倉藩の藩主である堀田正信にそれとなく意見するが、正信はかえって反発する始末。惣五郎の扱いに困った酒井は、徳川家の菩提所である上野三十六坊の凌雲院の大僧正・円寿院に惣五郎の身を預けることにした。

これはもう将軍家に直訴するしか手立てはないが、そうなると惣五郎への重いお仕置きは避けられないし、さらに女房、子供にも累が及ぶことになる。そうならないようにと今のうちに国許に帰ったらどうかと、円寿院は密かに惣五郎に勧めた。

上野三十六坊お出入りの駕籠屋、井筒屋五郎兵衛は義侠心のある男である。惣五郎はこの五郎兵衛と共に、江戸を発ち、市川・八幡・鎌ヶ谷・安食と過ぎて中宿まで来た。ここで泊ったのが島屋源兵衛という者の宿である。この宿には隠し部屋があり、惣五郎はここに匿われた。

この宿に堀田の役人である多賀四郎兵衛が目明し2人と共に乗り込んで来た。

四郎兵衛は「惣五郎はいないか」と詰め寄るが、駕籠屋の井筒屋五郎兵衛は宮様のおわす上野三十六坊に出入りが許されている自分への非礼ぶりに怒り出した。宿主の島屋源兵衛が酒や豪華な料理を用意すると両者は仲直りするが、このご馳走の支払いは四郎兵衛持ちであると聞かされる。

しかも額があまりに高額なので、四郎兵衛は逃げ出してしまった。

雪の降る夜、宿を抜け出した惣五郎は下総松崎(しもうさまんざき)の渡し場へと行く。渡し守の甚兵衛にすぐに舟を出して欲しいと言うが、惣五郎を追う堀田の役人の命令で暮れ六つから明け六つまで、舟は鉄の鎖で繋がれてしまっていて、出すことができない。惣五郎が民百姓を救うため力を尽くしていることを知っている甚兵衛は、その鎖を斧で引き裂き、舟を出す。

舟は水神の森に着き、惣五郎は真夜中の一面の雪の中、家へと向かう。

女房おきんと子供3人がいる家に辿り着いた惣五郎は、直訴を果たしたのちに親族が同罪で追われることを懸念して、女房のおきんに離縁状を手渡す。

しかし、おきんは「子供たちは村の者たちが育ててくれるだろう。自分も死ぬ覚悟だ。」と言って離縁状を受け取ってくれない。

そんな問答をしているうちに、子供の惣兵衛、源助が目を覚まして惣五郎がいるのに気づいた。

久しぶりに見る父親の元に駆け寄り、裾にすがりつく子供たちを払いのけ、ピシャッと戸を閉め女房、子供と涙の別れをして、元の道に戻った。

「佐倉義民伝 甚兵衛渡し場」 圧巻の山場、観客席は集中と静寂、

ハンカチを出して目尻を抑える人もいるさなか

プルルルルル・プルルルルル・プルルルルル・プルルルルル・・・(いつまでも止まぬあの音)

音がする方を片目で睨む観客席の多数の眼光

プルルルルル・プルルルルル・プルルルルル・プルルルルル・・・

電源を切るわけでもなく、隣の奥さんと思しき女の小さな声「お父さん、外へ出なさいよ」  
観客席の眼光はさらに数を増し、すごすごと腰を上げて出口へ向かう老人  
その後を引くように続く プルルルルル・プルルルルル・  
講釈師は微塵も揺るがず、自らのリズムを維持して読み進んでいく

惣五郎は、甚兵衛が舟で待つ水神の森へと急ぐが、土手を歩いているところで、目明しの喜右衛門という者にその姿を見られてしまう。喜右衛門は惣五郎を捕らえようとし、2人揉み合いになる。惣五郎の帰りが遅いので、心配になって様子を見に来た甚兵衛が加わった。甚平は舟の板子で喜右衛門の脳天を打って絶命させ、印旛沼へ投げ込んだ。  
甚兵衛は、惣五郎の直訴が果たされれば、惣五郎の死罪と同時に、加担した自分も罪を問われることは承知して、覚悟はできていた。

観客席は再び集中と静寂の中、甚兵衛の心意気に揺り動かされて、涙をぬぐう・・・  
カンコロリン・カンコロリン・カンコロリン・カンコロリン・  
この老婆は、電源を OFF にしてその場を繕った

講釈師は、ここでも微塵も揺るがず、自らのリズムを維持してさらに読み進む  
無事に惣五郎を下総松崎の船着き場まで渡し、西へ向かう惣五郎を見送りながら、甚兵衛は自らも印旛沼に身を投げてしまった。  
甚兵衛の死に報いるためにも命をかけて將軍家への直訴をしなければと、決意する惣五郎……。

#### ●講釈師の心の内

落語・講談等の会ばかりではないが、開演前に「携帯電話・スマートフォンをマナーモードか電源 OFF にして、音がしないようにして下さい」というメッセージが流れることが多い。

しかし、その時に指示に従って「音がしないようにする」ことをしない人が多い。そして、結果としてこのような場面を経験することが多い。日本人独特のごまかし感、「私は大丈夫のはず!」が問題を起こす結果となる。

話芸は、聞き手が集中して聴くうちに、聞き手の脳裏に仮想映像が浮かび上がり、あたかも動画を見ているかのような錯覚に陥ることを以て伝わるものである。この集中と静寂の中にこそ「話芸の凄さ」があるので、この場面での「雑音」は致命的である。

落語会では、滑稽話の場合には高座の上の演者が即興のセリフでチクリと刺すこともあるが、人情噺ではそういう細工は不可能である。

演者の力量ももちろんではあるが、それ以上に観客の覚悟と協力が重要になってくるのである。

この会が終演になって、観客が退場する段階で、このぶち壊しの二人の犯人はスタッフに謝罪や弁解のひとことを発するでもなく、出て行ってしまった。問題意識は全くないように感じられた。

「佐倉義民伝」を地元で語ってみたいと思って、横浜から酒々井まで参じた講釈師の高座には、それなりの気合が感じられた。迫力ある読み物の、しかも山場でこんなことが起きて、大変気の毒な会になってしまった。講釈師の心の内が手に取ることができるようだった。

以上